繪本直指寶

八

750
T2

繪本直指寶巻之八目録

細勾雲法　大勾雲法
畫江海波濤法
雌雄怒濤大洋奇澤
後宋馬遠筆意
高文進山水
米元章山水筆法

米友仁山水筆法
高克恭筆意
古筆山水八躰

細勾雲法

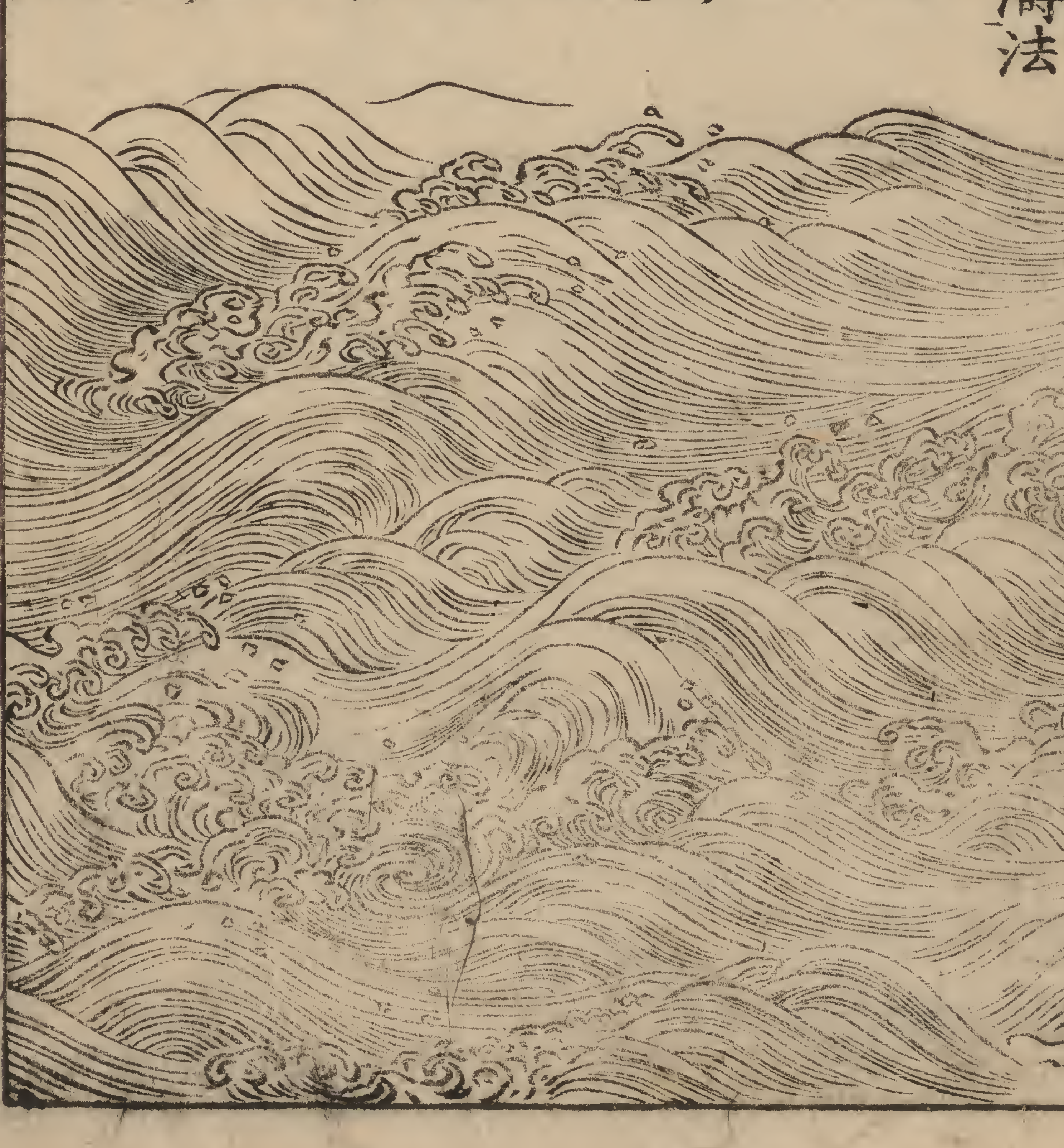
雲乃天地之大文章爲山川被錦繡疾如犇馬撞石有聲雲之氣勢如是大凡古人畫雲秘法有二一以山水之千巖萬壑相湊大忙處乃以雲間之蒼翠揷天倏而白練橫拖層々鎖斷上頭雲開髻青再露如文家所謂忙裡偷間反使閲者目迷五色一以山水之一丘一壑着意大間處乃以雲忙之水盡山窮膚寸斯起陡如大海幻作層巒如文家所謂引詩請客以增文勢余畫山水諸法殿之以雲者亦以古人謂雲乃山川之總亦以見虛無浩渺中藏有無限山皴法故山曰雲山水曰雲水○畫雲純用色漬望若堆起寔

無墨痕者為上若画青緑山水及工細皴法欲其相稱當以淡墨勾出淡青染之又唐人画雲有二種一ハ為吹雲法乃将薄粉軽染絹上勢若層雲隨風流動軽倩可人最為雅調一ハ為勾粉法于金碧山水中将粉照墨痕細勾小李将軍多用此法氣勢雄壮亦助煇煌

凡雲ハ深山樹木乃ろうより起るされど人の世に交接ときを青雲といひ世をのがれ山住乃身となり隠居するを白雲にて人といふ天気清明の時大山樹木乃ろに白気騰く立て散ハ風に吹され靡く不定と飛あり滝あれハ大ゆるの岩あつて水流るゝ地気昇て水気をもて雲となる風にほとひるけき行るゝ亦白気あつまり深く漸くに大になることもあり或ハ龍蛇のごとく或ハ白狗のごとく定まらず是を屯雲といふ大抵夏の雲は急に高く厚くとして大山の嶺より昇る気象綿のごとくのぼりこれを奇峰といふ風にそひ海に抄る時は色黒くなる水気を含む故也風を吹くされて大に盤り雨となる晴る時は空中に消散してとゞまる所なし

畫江海波濤法

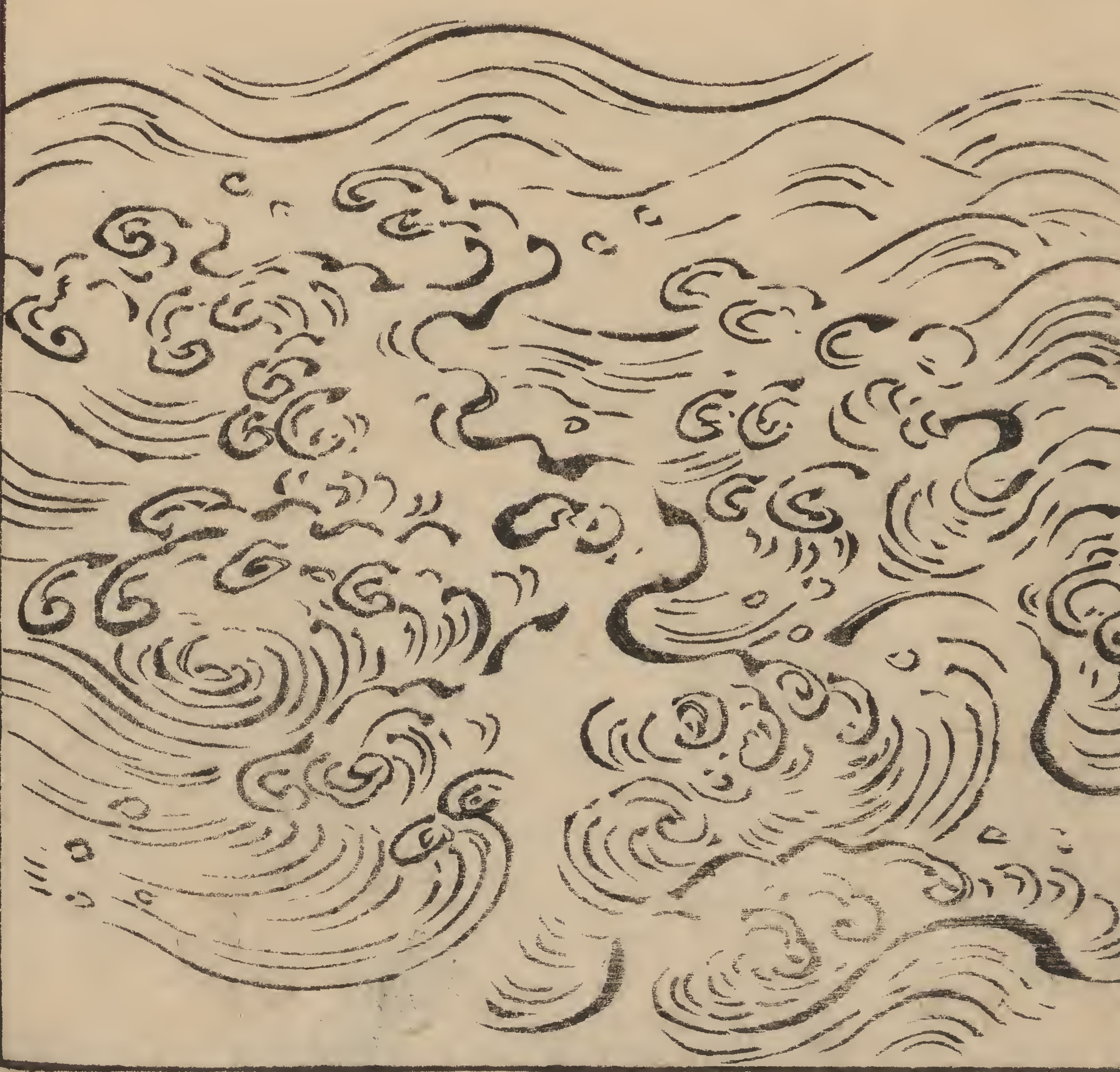
山有奇峰水亦有奇峰石尤怒捲巨浪排山海月初溶潮如白馬是時滿目皆多崇岡峻崿呉道玄畫水終夜有聲不



惟画水且善畫風而且能畫不假於風之層波疊浪畫水之能事畢矣

凡そ波ハ幻乃
おもしろに
あらしとされる
きゝて
のしあふあり
ざいまよさどろ
ゑゝさるところ
あまなり

雌雄荒濤
大洋奇峰
海中に潮行しり
ありさしのぼる
時り
風吹送る
折ハ
掛浪とて
波の上を
横ひ急る
濤あり
又落汐の時
落汐先より
風烈しく
吹とれは
大に濤を揚



これを
奇峯と
名付く
夕汐乃時ハ
出來れば
風ありゆへり
波濤ともに
あらし
波を高く
一切り
周由

後宋馬遠筆意

宋の高文進祖ハ唐の高道興その子高従遇が子なり曹呉二師に筆力快健にして色を施すも鮮に間山水を画く進に二子あり長を高懐節といひ次を高懐宝といふ共に世に名高く山水を画く名人と称ず高族三十余人ある中に高文進独り秀でたり

宋米芾字元章号襄陽用王洽之潑墨参以破墨積墨焦墨故融
厚有味人謂米氏善于用墨而余獨謂米筆施之書中時有奴張
見于書内惟覺圓厚圓猶可熟習成厚則直従天分中出天分薄
者学此猶欲冒于叔度顔回終未可也太芾雖学王洽寔菐源于
北苑近人学米大模糊與太明露乃交失之米明露處如微雲河
漢明星燦然然今之人則成鉄綿穿豆豉矣米模糊處如神龍矯
々隠見不測今人則糞草堆壊蕪穢不冶矣然則何以学米曰用筆
如錐用墨如飛又曰惜墨如金弄筆如丸筆墨之跡交鎔乃是眞米

後宋の米友仁に至りて畢竟章がよう家学を作りて山水の清秘を
衍を畧しの為を変じて別に一己の画法を建立す蓋をたちまち
変じて枝家ら雲煙縹渺としてる尚の意氣筆頭に湊るなり

米友仁
二米豈大理石
屏風哉何令
人之不善学
米也友仁
蓋變其
父之家
法而於煙
雲奇幻漂々
渺々若有樓
閣層々藏形

其内一洗
宋人窠臼
猶眉山之
于老果不得
不変然却有
不覺者在

今案ずるに
用ゐる不ある高克恭
米元章米友仁
高克恭らのぐまも
三家の法を
純拿なり

元の高克恭字ハ彦敬房山と号す高氏乃斎なり世に山水を描て房
山二人二米元章を学び並に画意を得より常に米の山水をぬきを
山を好む筆く山を幾箇も重子画く故手に従ひ一家の骨格を写す
為も秀逸なるを以て高家と称を世に在る然嫌とひふ是れより米家の
法を傳る故除文長清濱先生も米高の二家と称せしまきそう

古筆山水

八體

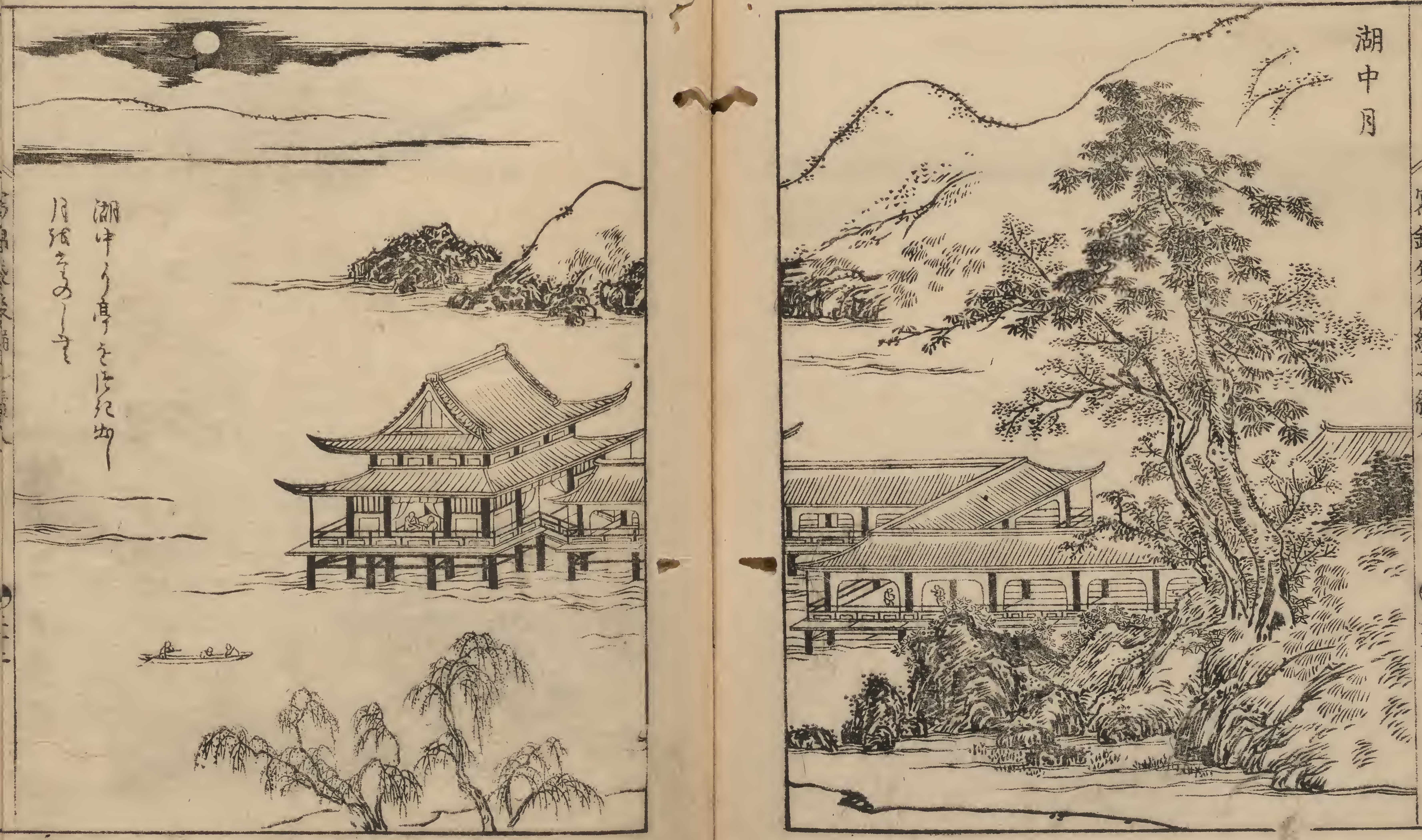
遠寺景

夜雨中

辻市

漁舟圖

歸帆圖


湖中月
湖中乃亭を漕き出し
月強きあめしさ

蘆鴈圖

雪中江天